



自分の持つ選択肢を 意識する生き方を

認定NPO 法人 日本紛争予防センター 理事長
瀬谷ルミ子 Seya Rumiko

私は仕事柄、アフリカや中東、アジアの国々で現地の人々とともに復興のための事業を行い、現地の政府、軍人、警察、住民に研修を行う機会が多い。

私にとって英語は、コミュニケーションのための「道具」だ。その道具を使うための「目的」を持ち、自らの能力や専門性を高め、腕を磨くことも必要だ。そしてその道具も、多いほうが便利である。言葉と同じくらい重要なのが、それぞれの地域の文化や慣習を理解することだ。例えば、イスラム教を信仰するソマリアやアフガニスタンなどの地域では、女性が髪や肌をあらわにしたり、公の場で積極的に発言したりすることが不適切と思われる場合もある。そのため、私も頭に布を巻き、身体のラインが出ないような服を着る。会議の際に男性スタッフと事前に話す内容を打ち合わせしておき、代わりに発言してもらったこともある。こうすることで、私が自分の価値観を押し付けにきたのではなく、現地の文化を理解し敬意を払っていると感じ取ってもらうことができ、信頼醸成の基盤となるのだ。

紛争地の人々を見て感じるのは、生きる上での「選択肢」の欠如だ。紛争地では、生きるか死ぬかすら自ら選べず亡くなっていく人々が数多くいる。紛争が終わっても、貧困や被災で、最低限の衣食住を確保するのに精一杯で、生き方を選ぶことも困難だ。

私たちの団体が、南スーダンの内戦で身寄りをなくして路上生活をするストリートチルドレンに社会教育や職業訓練を行う事業を始めた頃のこと。絶望と空腹からシンナーを吸ってばかりいた現地の子もたちに、「いま一番欲しいものはなに？」と聞いてみた。お金やドラッグ、と言うかと思ったら、ほぼ全員が「学校に行きたい」と答えた。彼らにとっては先の見えない生活のなか、想像できる範囲で唯一人生を変えて

くれるかもしれないものが、教育なのだ。しかし、それすらも満足に選ぶことができない。

私は、進路も決められず社会に不満ばかり抱えていた高校3年生のときにルワンダ内戦の犠牲者の写真を見て、自分には生き方を選ぶことができる権利があることに初めて気づいた。そしてそれは、世界の全ての人々が持つものではない、ということにも。

「皆さんの人生には無限の選択肢がある」という台詞は、聞き飽きている人も多いかもしれない。私がおもうひとつ付け加えたいのは、その選択肢のひとつひとつには「使用期限」があるということだ。自分で気づかないうちに、中学生の時点で既に使用期限が切れているものもある。例えば、プロのフィギュアスケーターやピアニストになりたいくても、中学生から始めて実現するのは極めて困難なように。

「やりたいことが多すぎて選択できない」と悩む人には、使用期限が短い選択肢を整理したうえで、「これを今やらなければ数年後に後悔する」と思うものはすぐに行動に移すことを勧めている。時間がたてばたつほど、行動しない言い訳だけがどんどん増えていき、動くのがさらに億劫になるからだ。

英語を将来の自分のための道具として今磨いておくかどうか、中学生にとっては選択肢のひとつ。その選択も含め、生き方の選択をひとつひとつ意識して行動に移すことで、自らの人生をデザインする権利をフル活用してほしいと思う。

せや るみこ

中央大学卒、英ブラッドフォード大学紛争解決学修士号。ルワンダ、アフガニスタン、シエラレオネ、ソマリアなどで国連PKO、外務省、NGOの職員として勤務・事業を統括。専門は紛争後の平和構築、治安改善、兵士の武装解除・動員解除・社会再統合(DDR)。著書に『職業は武装解除』(朝日新聞出版)。Newsweek 日本版「世界が尊敬する日本人25人」(2011年)等に選出。